

日本人の酸関連疾患を再考する

稲森 正彦(横浜市立大学附属病院 消化器内科・臨床研修センター)

【日本人の酸関連疾患を取り巻く環境の変化】

酸関連疾患とは、従来、胃潰瘍・十二指腸潰瘍を中心に捕らえられてきたが、近年食生活の欧米化やヘリコバクター・ピロリの感染率の低下などの要因により、胃食道逆流症(逆流性食道炎)の現地臨床に占める割合が増えてきており、胃食道逆流症をはじめとする日本人の酸関連疾患を取り巻く環境や疾患構造が変化してきている。

具体的には日本人の衛生環境の向上に伴い、ヘリコバクター・ピロリの感染率は若年者を中心に低下し、それに伴った胃粘膜の萎縮性胃炎の頻度は減少し、胃酸の分泌能が増加していることが言われている。また、ヘリコバクターピロリ起因性の胃潰瘍に代わり高齢化に伴う、NSAIDs 服用患者は増加し、NSAIDs 起因性の消化性潰瘍等の新たな課題も見受けられる。

食生活の欧米化に関しても動物性たんぱく質や脂質の摂取量の増加は胃酸の分泌量の増加や、胃酸の食道への逆流を促す。また、身長や体格(BMI)の変化も日本人の酸分泌能に影響していると言われている。これら多様な背景からくる環境の変化により、日本人の胃酸分泌能は増加をしていることが、実際に日本人を対象とし、酸分泌能を測定した試験から報告されており、代表的な酸関連疾患である胃食道逆流症(逆流性食道炎)の有病率は増加していることが報告されている。

【酸関連疾患の更なる治療成功を目指して】

2009 年に日本消化器病学会より刊行された胃食道逆流症(GERD)ガイドラインでは胃食道逆流症

の長期管理の主要目的として酸逆流による症状のコントロールと QOL の改善に加えて合併症の予防が挙げられている。1 週間に 1 回以上、酸逆流に起因する症状が発現している患者は QOL に対して悪影響を与えられており、生活習慣の変更や労働生産性への影響など日常生活に支障を来すことが言われている。

胃食道逆流症患者の低下した QOL は酸逆流を防ぐ治療により改善する。胃食道逆流症の治療には胃壁細胞のプロトンポンプに作用し、胃酸分泌を強力に抑制するプロトンポンプ阻害薬が第一選択薬で用いられるが、本年初めに三輪らが逆流性食道炎の治療の実態について医師及び患者に対してインターネット調査を行った所、6 割以上の患者でプロトンポンプ阻害薬を服用中にも関わらず週 1 回以上の胸やけ等の症状が残っていることが報告されており、中には治療薬に加え、自身で市販薬を購入し、服薬することにより、症状に対応している患者もいた。加えて、最近では日常診療の中でプロトンポンプ阻害薬による 8 週間の治療によっても胸やけが許容範囲まで減少しない難治性胃食道逆流症の症例を診ることも少なくない。

この現状を踏まえ、胃酸と症状の関連などの最新の知見、臨床経験や研究成果をまじえた上で日本人の酸関連疾患を再考し、現代における酸分泌抑制薬の役割、また酸関連疾患の環境変化にあわせた胃食道逆流症治療の更なる成功の為に望まれる治療についても考察したい。